岐阜大学カリキュラム開発研究
20●●.●, Vol.● No.●, ●-●

小学５・６年生を対象としたアルファベット知識（書く能力）の実態調査

瀧沢広人*1

文部科学省は、2017 年告示の学習指導要領において、小学校 5・6 年生に教科としての外国語を新設した。2020 年 4 月、教科「外国語」は、従来の「聞く・話す」に加え、「読む・書く」が入り、4 技能 5 領域として指導がスタートした。そして、英語を「読む・書く」の前提には、アルファベット文字の理解が欠かせない。そこで筆者は、外国語を学ぶ小学 5・6 年生は、どの程度アルファベットを書くことができるのか実態調査を行った。調査対象校は、岐阜市の 2 つの小学校（A 校：5 年生 105 名、6 年生 102 名, B 校：5 年生 86 名、6 年生 105 名）であり、対象者数は 398 名である。その結果、大文字では平均で約 24～25 文字を書くことができ、小文字では 20～24 文字書けていることがわかった。また、大文字の誤りでは、無解答と形の誤りがほとんどを占めた。誤りの多い大文字には、J や I が突出しており、小文字は、q や j,l,f,d,g などが確認された。大文字が書けることと小文字が書けることの間にも相関が認められた。

〈キーワード〉 アルファベット知識 書くことの能力 小学校英語 文字指導 文字の誤り

1. はじめに

1.1 小学校英語の導入経緯

戦後の日本の小学校外国語教育改革は、1986（昭和 61）年の臨時教育審議会「教育改革に関する（第２次答申）」により始まる。答申において、「英語教育の開始時期についても検討を始める」と提言後、1992（平成 4）年、文部科学省は、研究開発学校を全国に設置し、小学校英語の導入を進めるための研究を開始した。その後、1996（平成 8）年の中央教育審議会第一次答申において、「総合的な学習の時間の活用等により外国語に触れる機会を持たせること」を提言、1998（平成 10）年、学習指導要領の改訂に伴い、「総合的な学習の時間」において、英語活動を実施することが可能となった。

1.2 文部科学省による文字指導の取扱い

1.2.1 「総合的な学習の時間」における文字指導

文部科学省（1998）は、小学校学習指導要領において、総合的な学習の時間の英語活動の取扱いを「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときは，学校の実態等に応じ，児童が外国語に触れたり，外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること」とし、それ以上の解説はなかった。そのため、文部科学省（2001）は、学習指導要領に代わるものとして、『小学校英語活動実践の手引き』を発刊し英語活動の指導指針を示した。文字指導については、音声と文字を切り離して，音声を中心にした指導を心がけることや、英語の文字と音声を同時に媒体として意思の伝達を図ろうとすることは、小学校の子どもにとっては負担が大きく、英語嫌いを生み出すことにつながるとし、文字指導については慎重な姿勢を示した。その後、中央教育審議会（2006）の外国語専門部会において、英語活動の取組状況についての議論がなされ、活動内容や授業時間が各学校に任されていることにより、学校間でばらつきが見られることや、教育の機会均等や中学校への円滑な接続のためにはある程度の共通の教育内容を提供することが求められるとし、英語教材「英語ノート 1,2」（文部科学省, 2009）の作成に至る。2008 年には、次期学習指導要領が告示されていたため、「英語ノート 2」には、学習指導要領を考慮し、アルファベット文字を扱っている（Lesson 1 及び 2）。

なお、本研究で用いる「文字指導」とは、「直接的にアルファベット文字を指導すること」であり、アルファベットを声に出して読んだり，ノートに書き写したりすることを指す。一方、絵カードに文字が添えら

*1 岐阜大学教育学部英語教育講座
The research on the ability of writing alphabet among 5th and 6th graders

れている場合がある。これは、文字を指導することが主眼ではなく、単語の発音練習等がねらいとなるため、これは「文字を使っての指導」とし、「文字指導」とは区別する（伊東, 2013：30）。

このように、2002 年度より始まった総合的な学習の時間内における英語活動では、「文字指導」は行わない方針で始まった。

1.2.2　領域「外国語活動」における文字指導

2011（平成 23）年の小学校学習指導要領において、文部科学省は、5・6 年生を対象に「外国語活動」を新設した。外国語活動では、アルファベットの取扱いを、「アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」とし、「アルファベットなどの文字の指導については，例えば、アルファベットの活字体の大文字及び小文字に触れる段階にとどめるなど、中学校外国語科の指導とも連携させ、児童に対して過度の負担を強いることなく指導する必要がある」としている。そこには、5・6 年生にとっての外国語は、初めて学習する言語であり、文字は，外国語の音声に慣れ親しんだ段階で開始したほうがよいという考えによるものである。

前述の「英語ノート 1, 2」は、この趣旨を組み込み、6 年生（英語ノート 2）で文字を扱っているが、その後の「Hi, friends! 1, 2」（文部科学省, 2012）では、5 年生で大文字、6 年生で小文字を扱い、文字を 2 年間かけて学ぶようになっている。また、2015（平成 27）年、文部科学省は、Hi, friends! Plus を作成し、研究開発学校等にデジタル教材として配付した。Hi, friends! Plus は、2020 年度からの教科化を睨み、文字指導の充実を図った教材である。

このようにして、「文字は扱わない」とする英語活動から、「文字はコミュニケーションを補助するもの」「アルファベットの大文字及び小文字に触れる段階にとどめる」という外国語活動へと段階的に文字が導入され、2020 年の教科化では、「文字が読める、書ける」ということが目標に明示された。

1.2.3　教科「外国語」における文字指導

2020 年の小学校学習指導要領では、3・4 年生で「外国語活動」、5・6 年生で「外国語」が教育課程に組み込まれ、5・6 年生の「外国語」では、「聞く」「話す」に加え、「読む」「書く」の学習が行われることとなった。当然のことながら「読む」「書く」の学習の前提は、文字を理解していることである。文字指導は，外国語の音声に慣れ親しんだ段階で開始したほうがよいということから、3・4 年生の「外国語活動」で「文字の読み方が発音されるのを聞いた際に，どの文字であるかが分かるようにする（聞くこと）」とし、まずは「聞いて分かる」と目標としている。次に 3・4 年生で、文字に慣れ親しませた後、5・6 年生の「外国語」で、「活字体で書かれた文字を識別し，その読み方を発音することができるようにする（読むこと）」「大文字，小文字を活字体で書くことができるようにする（書くこと）」とし、「読める・書ける」を目標としている。すなわち、文字が読める・書けるは、小学生の定着事項であり、教師は児童にきちんと身に付けさせ、中学校に進学させなくてはいけないこととなる。従って中学校学習指導要領（平成 29 年告示）では、アルファベットの指導事項は削除されており、小学校外国語教育の責務は重大である。

では、小学生はどの程度、アルファベット文字が書けるのであろうか。筆者の中学校での指導経験からすると、小学生がアルファベット文字を書けるようになるのは、相当大変なことではないかと推察する。そこで、小学生のアルファベットを「書くこと」の能力を把握するために、実態調査を行うことを考えた。なお、本研究では、「読み」が「書き」を先行すること（中村・末松・林田, 2008）から、アルファベットを「書く」ということについて実態調査を行い、「読み」の力も予測したい。

2. 「アルファベット調査」における先行研究

アルファベット調査は、アレン（2006）をはじめ、国立教育政策研究所（2009）、北條・君（2011）、石濱（2015a,b）、畑江・段本（2017）、兼重・藤井・瀧本・梅本・小笠原（2020）がある。そこで、先行研究を２つに分類してみると、１つは、「発音された文字を聞いて書く」と言う調査となり、もう１つは、「音声は発せられずに書く」に分けられることがわかった。以下、その２つについて先行研究を概観する。

2.1 「発音されるのを聞いて書く」調査

アレン（2006）は、アルファベットの知識を、「発音された文字を選ぶ形式」や「聞こえてくるアルファベットを書く」という方法で、小学校 5・6 年生を対象に文字認識について調査している。「聞こえてくるアルファベットを書く」では、すべての大文字を調査するのではなく、A,J,R,O,W,K,L,M,N,H,B の文字を調査した結果、R の正答率（72%）だけが低く、その他は 88%以上の正答率だったことが示され、高学年の読む力と書く力には差がないことが確認されている。

国立教育政策研究所（2009）も、一部の文字（大文字：F,D,A,G,M, 小文字：e,r,h,t,i）に対して、書くことの調査をしている。「聞いて書く」という方法であり、大文字では、D と M の正答率が低い結果が出た。その理由として、D は音声上、T と音が似ていて、T と書いた児童が多くいた（H19：39.6%, H20：32.2%）ことをあげている。M についても同様、N と書いた児童がいた（H19：16.5%, H20：31.3%）。音が似ているために、異なる文字を書いてしまっていることがわかる。また、G については、J や Z と書いている。また小文字での誤答では、小文字を書くべきところ、大文字を書いている誤りが一番多く（I：3%, T：11.7%, R：4.3%, E：8.7%, H：10.9%）、児童は、大文字と小文字に混同が見られることがわかる。なお、解答用紙には、4 線はなかったことから、文字の形が正しく書けていれば正答と理解する。

北條・君（2011）は、4 年生（n=78）を対象に、フォニックス指導を行い、その過程で、アルファベットの「書くこと」の調査を行っている。方法は、「『V』の発音がいわゆる『ヴイ』ではなく、[vi:]と発音しているため（同：5）」という記述から、「聞いて書く」というやり方であると推察する。結果は、平均正答数で、大文字 23.6 文字、小文字 21.3 文字であった。また、文字ごとの正答率も示しており、大文字では 26 文字すべてが正答率 80%を越えている。さらに大文字の中で、正答率が 90%を越えていた文字は、「B D E F I J K O Q S T U W X」の 14 文字であった。また、小文字の正答率が 80%以上の文字は、「b d e f i j k u y z」の 10 文字であり、70%以上の正答率は、「a c g h m n s v」の 8 文字になる。正答率 60%以上は、「l r」であり、正答率が一番低かったのは、「t（58.97%）」であった。「聞いて書かせている」ことから、大文字では、V や G, Z, R, M 等で、やはり正答率が低くなっており、音声の影響も少なからずあると推察される。なお、採点基準や 4 線上に書かせているかの情報は不明であり、何をもって正答にしているかはわからない。

兼重・藤井・瀧本・梅本・小笠原（2020）は、文部科学省指定、英語（外国語）教育強化地域拠点事業を受けた小学校の 6 年生（n=56）を対象に、複数の方法で、アルファベットを書く調査をしている。そのうちの 1 つに、「聞こえたアルファベットを書く課題」がある。ここでは、国立教育政策研究所（2009）でも示唆されたように、誤答例として、G-Z や I-R、L-O, N-L, M-L, A-L, G-J が挙げられ、兼重らはこれを「音声的要因」による誤りとしている。また、V-Y のように似た形による誤りは「形態的要因」とし、小文字にもその傾向が見られると報告している。

2.2 「音声は聞かせずに書く」調査

石濱（2015a,b）は、アルファベット指導を行う前と行った後で、どのくらいアルファベットが書けるようになったのか等を調査する中で、事後テスト時において、大文字と小文字を書かせている。4 線が与えられ、児童がその 4 線の上に書くという方法である。

2 校で実施した結果、M 小（n=20）では、平均正答数が、大文字では約 20 文字、小文字は約 13 文字、また、I 小（n=84）では、大文字は約 22 文字、小文字は約 16 文字であった。ここから、児童は大文字の 20～22 文字を書くことができ、小文字は、13～16 文字程度書くことができるとわかる。

なお、北條ら（2011）と同様に、文字ごとの正答率も示している。正答率を低い順に並べると、M 小では、大文字は J（55%）、R と V（60%）、Z と L（65%）という順になっている。また、小文字では、f と q（10%）、j（15%）、l（25%）、w（32%）と言う順である。同様に、I 小では、大文字では、V（65.5%）、J（69.0%）、X（71.4%）、Y（77.4%）、R（79.8%）の順であり、小文字は、q（34.5%）、f と j（40.5%）、m（50.0%）、l と v（52.4%）の順となっている。このことから、2 校を比較してみると、大文字では、J や R,V といった文字が共通して正答率が低く、小文字では、q や f, j, l,

といった文字が共通して書けないことがわかる。ただ、調査指示文において、「アルファベット 26 文字の大文字と小文字を書いてください。わからないところは書かなくてかまいません。書けるアルファベットだけでよろしいです」ということから、児童にとっては、どのような文字があったのか思い出せなくて書けていないことも考えられる。アルファベット順の終わりの方の V や X,Y,Z への正答率が低いのは、そのことも影響されているのではないかと考える。

畑江・段本 (2017) は、文字指導の初期段階として、「アルファベットの小文字の指導を丁寧に工夫して行うことが、児童の小文字の認知及び文字学習への興味・関心にどのような影響を及ぼすか」ということを明らかにするため、公立小学校の 5 年生（n=70)、6 年生 (n=89)、国立大学附属小学校の 5 年生 (n=99)、６年生（n=112）を対象に、アルファベットの小文字を「書く」ことの調査をしている。方法は、左ページに大文字、右ページに４線が印刷され、その４線上に小文字を書くという形式である。事前と事後テストの小文字の正答率は、公立小５年（12.6→18.3)、６年（14.4→18.7)、附属小５年 (21.1→23.1)、6 年 (22.6→24.3）であり、指導の効果が確認された。　なお、文字ごとの正答率も示しており、正答率の低い文字として、公立小の 5 年生では、q, j, l, f, h、6 年では、j, q, f, p, g、附属小 5 年生では、j, a, q, u, f、 6 年生では j, q, u, l, f となっており、j や q, f などは、学校間・学年間を問わず習得には困難を示すようである。このことは、石濱（2015a,b）の q や f, j, l,とほぼ一致している。採点については、４線上に書かれた小文字のブロック体に近似していることを採点基準とし、文字の形及び４線上の書き方の正確さで正答としている (畑江, 段本, 2017 : 27)。

兼重・藤井・瀧本・梅本・小笠原（2020）は、前述の「聞こえたアルファベットを書く課題」とともに、「覚えているアルファベットの大文字・小文字を書く課題」も行っている。方法としては、４線のみ印刷されている用紙に、児童がアルファベットを思い出して書いていく形である。結果、平均正答数は、大文字 23.7、小文字 19.6 であった。しかしながら、これも石濱（2015a,b）の研究と同様、思い出せなかった文字は書けないこととなり、そのことについては、兼重らも指摘しており、思い出して書く際、抜けやすい大文字に W,U,V があると言及している。また、小文字では、f,p,q,v,w が書かれない傾向にあったと報告している。誤答では、大文字で鏡文字になってしまう文字に、J（10 件）や N（2 件)、Z（1 件）や小文字の j があるとしている。さらに、小文字を書くべきところ大文字をそのまま小さくして書く傾向が多く見られたと報告している。このことは、国立教育政策研究所 (2009) でも確認されたことである。

以上の先行研究から、今までにアルファベットの知識を測る調査が行われてきたが、そのやり方は様々であることがわかる。アレン(2006)や、国立教育政策研究所（2009)、北條・君（2011）は、「発音されるのを聞いて書く」という方法で調査し、石濱（2015a,b）や、兼重ら（2020）は、「音は聞かず文字を４線に書く」という方法である。前者では、音を誤って聞いてしまうことによって、正確なアルファベットの知識が測れないという課題が見られるが、測りたい文字の知識をピンポイントで調査することができる。また後者では、「文字を想起して書く」という形式であるため、児童がアルファベット順を暗記していればよいが、そうでない場合は、どのような文字があったのか思い出すことができずに書けないということが生じる。畑江・段本（2017）は、あらかじめ大文字を提示していることから、思い出せず書けないということは回避されるが、児童は大文字を見て、小文字を推測してしまう可能性も考えられる。しかし、調査の目的はそこにあり、小文字の指導において、大文字がどのように小文字に変化するかの過程を児童に考えさせたり、その変化の様子をデジタルで見させたりしている。その事後テストであるので、大文字を提示し、小文字を書かせるのは目的に合致している。

3. 本研究について

3.1　目的

本研究は、小学生はどの程度アルファベットが書けるのかを調査し、今後の文字指導に活かしていくために、次の研究課題を設定した。

RQ1：小学生は、アルファベットの大文字と小文字をどの程度書くことができるのか。

RQ2：小学生は、どの文字において書くことの習得率が低い傾向にあるのか。

RQ3：習得率の低い文字では、児童はどのような誤りの傾向が見られるか。

3.2　方法

3.2.1　対象者

岐阜市内の小学校２校の５、６年生が対象である。２校とも小学校１年生から英語学習を行っている。

岐阜Ａ小学校　５年生 105 名，６ 年生 102 名

岐阜Ｂ小学校　５ 年生 86 名，６ 年生 105 名

3.2.2　調査時期

調査は、令和２年 10 月～11 月に行った。

3.2.3　調査用紙と採点基準

調査方法は、カタカナで文字の読みが記されている４線の入っている用紙に、左ページに大文字を、右ページに小文字を書かせる形で調査した。V(v)については、カタカナ表示を「ヴィ」としたため、児童から質問があった際には、「ブイ」であることを口頭で伝えることとした。なお、調査用紙については、当初「文字をアルファベット順に書きなさい」と考えたが、文字の順番を知っているという別の要素も必要とされ、カタカナで記すこととした。このことにより、分からない文字は書かずに、次の文字を書くことができ、余分な意識を使わずに書くことができると考えた。

採点基準は以下である。

・明らかに文字の形が違う　→不正解

・文字の形は正しいが、４ 線上に書く位置が違う。→不正解

・文字が４線の各線にきちんとは触れてはいないが、形は正しく書けている。→正解

・文字の形は正しいが、別の場所に書いている。→　不正解　　例）Ｙのところに W と書く

なお、大文字の I については、本来は、上と下に短い棒（装飾＝セリフ）がない形の I も正しいが、教科書で I というセリフを付けた文字体が用いられ指導されていることから、本調査では、上と下に付ける短い横棒がないものは、誤りとして分類した。

4. 結果及び分析

4.1　平均及び記述統計量

Ａ小学校及びＢ小学校の正答数の平均を、表１及び表２に示す。

表 1.　Ａ小学校の正答数の平均

	５年（n=105）			６年（n=102）		
	１組	２組	３組	１組	２組	３組
大文字	25.23	24.60	25.54	25.50	25.63	25.29
	25.20			25.35		
小文字	25.20	23.14	23.46	25.29	24.51	23.71
	23.79			24.42		

表 2.　Ｂ小学校の正答数の平均

	５年（n=86）			６年（n=105）		
	１組	２組	３組	１組	２組	３組
大文字	24.75	24.77	25.39	24.23	25.03	25.29
	24.97			24.85		
小文字	21.04	19.73	21.57	20.66	22.71	23.37
	20.76			22.25		

大文字の平均正答数は、約 24.85～25.98 であり、この時期、５・６年生は、大文字をほとんど書くことができることがわかる。また、小文字は、約 20.76～25.23 であり、大文字と比較すると、散らばりが感じられる。なお、記述統計量は以下である（表 3）。

表 3.　記述統計量

学校	学年（n）	文字	最小値	最大値	平均値	標準偏差
Ａ小	５年	大文字	12	26	25.20	1.762
	(n=105)	小文字	5	26	23.79	4.303
	６年	大文字	20	26	25.25	1.174
	(n=102)	小文字	10	26	24.42	2.913
Ｂ小	５年	大文字	5	26	24.97	2.619
	(n=86)	小文字	1	26	20.76	6.132
	６年	大文字	0	26	24.85	3.225
	(n=105)	小文字	0	26	22.25	4.986

4.2　正答率

次に文字の正答率を見てみたい。表 4、表 5 は、それぞれＡ小学校及びＢ小学校におけるアルファベット文字の正答率を高いものから低いものへと降順で並び替えたものである。

表４　岐阜市Ａ小学校におけるアルファベット文字の正答率（数字は%）

	大文字				小文字		
	５年生 (n=105)	６年生 (n=102)	全体 (n=207)		５年生 (n=105)	６年生 (n=102)	全体 (n=207)
A	100.0	100.0	100.0	a	100.0	100.0	100.0
B	100.0	100.0	100.0	o	99.0	100.0	99.5
O	100.0	100.0	100.0	c	99.0	99.0	99.0
S	100.0	100.0	100.0	s	99.0	99.0	99.0
W	100.0	100.0	100.0	x	97.1	100.0	98.5
C	99.0	100.0	99.5	w	97.1	99.0	98.1
D	99.0	100.0	99.5	z	96.2	99.0	97.6
X	99.0	100.0	99.5	v	95.2	99.0	97.1
Z	99.0	100.0	99.5	e	95.2	98.0	96.6
H	100.0	98.0	99.0	u	97.1	96.0	96.6
T	98.1	100.0	99.0	r	92.4	95.0	93.7
E	98.1	99.0	98.5	p	88.6	97.0	92.7
K	97.1	100.0	98.5	k	89.5	95.0	92.2
F	97.1	99.0	98.1	t	92.4	92.1	92.2
G	96.2	100.0	98.1	h	88.6	94.1	91.3
Q	98.1	98.0	98.1	i	88.6	93.1	90.8
R	98.1	98.0	98.1	y	84.8	92.1	88.3
V	96.2	100.0	98.1	b	84.8	90.1	87.4
L	98.1	96.0	97.1	g	88.6	84.2	86.4
Y	95.2	98.0	96.6	l	85.7	86.1	85.9
N	96.2	95.0	95.6	d	84.8	86.1	85.4
U	94.3	97.0	95.6	m	82.9	88.1	85.4
P	94.3	96.0	95.1	n	84.8	85.1	85.0
M	93.3	95.0	94.2	f	81.9	87.1	84.5
I	84.8	91.1	87.9	q	81.0	88.1	84.5
J	81.0	86.1	83.5	j	71.4	74.3	72.8

表 5　岐阜市 B 小学校におけるアルファベット文字の正答率（数字は%）

	大文字				小文字		
	5 年生 (n=86)	6 年生 (n=105)	全体 (n=191)		5 年生 (n=86)	6 年生 (n=105)	全体 (n=191)
A	100.0	99.0	99.5	a	98.8	99.0	99.0
B	100.0	99.0	99.5	s	96.5	96.2	96.3
G	100.0	99.0	99.5	v	94.2	95.2	94.8
C	98.8	99.0	99.0	c	94.2	94.3	94.2
D	98.8	98.1	98.4	x	94.2	94.3	94.2
O	97.7	99.0	98.4	z	93.0	94.3	93.7
X	97.7	99.0	98.4	o	93.0	92.4	92.7
E	98.8	97.1	97.9	u	90.7	92.4	91.6
F	97.7	98.1	97.9	e	88.4	90.5	89.5
S	97.7	98.1	97.9	w	86.0	88.6	87.4
Z	98.8	97.1	97.9	t	86.0	87.6	86.9
H	96.5	98.1	97.4	k	84.9	86.7	85.9
P	97.7	97.1	97.4	y	80.2	83.8	82.2
T	96.5	98.1	97.4	b	75.6	81.0	78.5
Q	96.5	97.1	96.9	n	75.6	80.0	78.0
M	97.7	95.2	96.3	i	75.6	79.0	77.5
V	98.8	94.3	96.3	m	74.4	79.0	77.0
W	98.8	93.3	95.8	h	72.1	77.1	74.9
K	96.5	94.3	95.3	g	70.9	76.2	73.8
N	94.2	96.2	95.3	f	69.8	75.2	72.8
L	95.3	94.3	94.8	r	69.8	75.2	72.8
R	94.2	94.3	94.2	d	68.6	75.2	72.3
U	94.2	93.3	93.7	l	68.6	74.3	71.7
Y	91.9	91.4	91.6	p	65.1	71.4	68.6
J	83.7	84.8	84.3	q	58.1	65.7	62.3
I	77.9	80.0	79.1	j	54.7	63.8	59.7

表 4 のとおり、岐阜市 A 小学校の全体では、大文字については、I 及び J を除き、90%以上の正答率となっている。また、小文字については、j を除き、80%以上の正答率になっている。また正答率 90%以上の小文字は 16 文字である。学年別でみると、大文字については、表 1 でも確認できるが、学年間に差はあまり感じられない。小文字については、6 年生では、j と g を除いた他の 24 文字は、正答率 85%以上となっているが、5 年生では、85%に達していない文字が 8 文字あり、85%以上は 18 文字である。大文字と比較すると、小文字は学年間で習得に差を感じる。

表 5 の岐阜市 B 小学校の全体では、大文字において、I 及び J を除き、全て 90%を越えている。この結果については、A 小学校の傾向と全く同じである。しかしながら、小文字については、半分の 13 文字が 80%に達しておらず、正答率 85%を越えているのは 12 文字である。A 小学校が 18 文字であり、B 小学校が 12 文字であることから、学校間における差も感じられる。小文字の正答率の比較を A 小学校と B 小学校の学校間でグラフにしてみると次のようになる（図 1）。

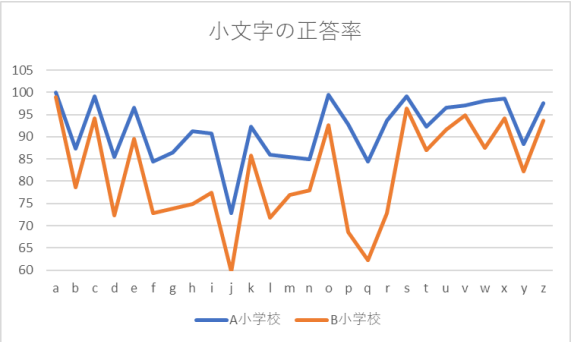

図 1　A 及び B 小学校の小文字正答率の比較

小文字すべてにおいて、A 小学校の方が B 小学校よりも正答率が上回っていることがわかる。また、グラフの傾きが同じ傾向を示していることから、A 小学校で正答率の低い文字は、B 小学校でも低い傾向にあり、小文字の習得困難度には、共通するものがあるように感じる。また、図 2、図 3 において、大文字と小文字の不正解数を見比べてみると、大文字は、I と J の誤り数が突出して多くなっているが、他の文字の誤りはそれほど多くはなくあまり目立たない。しかし、小文字では、j と q に誤り数が目立つものの、その他の文字についても、誤りが多く見られ、小文字については、特定の文字ということではなく、全体的に習得が難しいということがわかる。

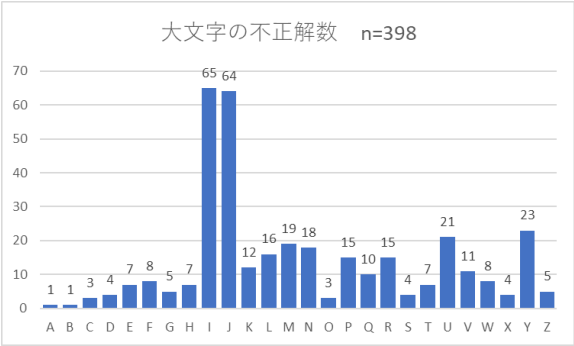

図 2　A 及び B 小学校における大文字の不正解数

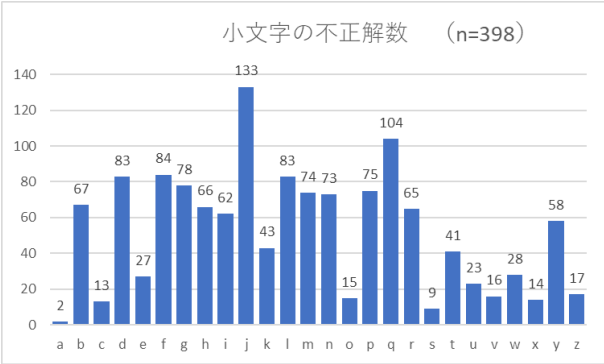

図 3　A 及び B 小学校における小文字の不正解数

4.3　習得を困難にしている文字

大文字、小文字の正答率が低い文字を見てみると、低い順に次のようになる（表 6）。

表 6　正答率の低い大文字と小文字

大文字		小文字	
A 小学校	B 小学校	A 小学校	B 小学校
J	I	j	j
I	J	q	q
M	Y	f	p
P	U	n	l
U	R	m	d
N	L	d	r
Y	N	l	f
L	K	g	g

表 6 により、大文字では、I と J、小文字では、q と j が、共に正答率の低い文字と確認された。その他にも、共通しているのが、大文字では、N,U,L Y があり、I と J を含めると、正答率の低い 8 文字のうち、6 文字が重なっていることがわかる。また、小文字については、f,l,d,g に i と j を加えると、小文字も 6 文字であり、困難な文字であることがわかる。

4.4　誤りの傾向

次に誤りの傾向を見てみたい。次の表 7、表 8 は、大文字、小文字の誤りの個数を、誤りの分類で分けたものである。大きく、無解答、4 線上への記述の誤り、文字の形の誤りの 3 つで区分けした。

表 7　大文字の誤りの分類

大文字	無解答	4線	形	合計
5 年	40	2	51	93
6 年	59	2	58	119
合計	99	4	109	212
割合	46.7	1.9	51.4	100

表 8 小文字の誤りの分類

小文字	無解答	4線	形	合計
5 年	272	57	120	449
6 年	128	76	186	390
合計	400	133	306	839
割合	47.7	15.9	36.5	100

このことから、大文字については、4 線上に書く際の誤りはほとんどなく、無解答と文字の形の誤りで 2 分されている。小文字については、特に 5 年生で無解答が多く、小文字の形を思い出すまでに至らなかったことを示す。6 年生では、適切に 4 線に書くということや形の誤りが多くあるように見えるが、無解答の多い 5 年生と比較すると、何かしら書いた上での誤りということで、誤りが多い結果となっている。小文字では、4 線上に適切に書く誤りよりも、文字の形の誤りが多いことから、やはり小文字の習得は困難であるといえる。また、誤りの分類の中で、共通して見られた誤りに、大文字では「小文字を書いている」「鏡文字になっている」というのが多く、小文字では、「4 線が適切に使われていない」「鏡文字」「j や i の点をうつ位置が明らかに異なっている」「p と q、b と d の混同」などがあり、文字に特徴がなく、形の似ている文字の多い小文字は、より習得に困難を示すと考える。

4.5　大文字と小文字の習得状況における相関

大文字と小文字の相関は、A 小学校（5 年 : r=.675, 6 年 : r=.616）、B 小学校（5 年 : r=.585, 6 年 : r=.762）となり、B 小学校の 6 年生において、大文字と小文字の習得状況に強い相関が見られ、その他については、中程度の相関が確認された。

5　考察

本研究では、RQ1 として「小学生は、アルファベットの大文字と小文字をどの程度書くことができるのか」を確認することであった。4.1 での平均点等から、児童の多くは、大文字で 24～25 文字書くことができ、また小文字では、20～24 文字書くことができることが確認できた。これは筆者の予想以上の習得率と感じた。またこれらは、先行研究の調査と比較しても高い数値であり、対象校の 2 校については、小学校 1 年生からの英語学習を行っていることもあり、英語への親しみや興味関心や、英語学習の積み重ねがあることがその効果として表れているものと考えられる。

RQ2 では、「小学生は、どの文字において書くことの習得率が低い傾向にあるのか」であったが、本調査において、大文字の I と J の習得に課題が見られることがわかった。また、3.2.3 で述べた通り、教科書の文字体に準拠させ、上下に短い棒がない文字を書いたものについては、正答から外したため、I の習得状況が低くなっているが、学校教育において、セリフのない I を認めていくかどうかは、また議論の余地があるようと考える。小文字については、石濱（2015a,b）や兼重ら（2020）、北條ら（2011）の先行研究と同様、q, j, l, f, 等の文字において、正答が少なくなっており、習得しづらい文字が共通に存在することが再確認された。児童が習得しづらい文字を教師があらかじめ気づき、意図的、明示的に指導していく手立てが小学校で必要になってくると考える。

RQ3 は、「習得率の低い文字では、児童はどのような誤りの傾向が見られるか」であった。誤りには大きく「形の誤り」と「4 線の適切な使用」があるが、大文字における誤りで多くを占めたのが、大文字を書く

べきところを小文字を書いている誤りであった。特にアルファベットの後半には、o や p、s や v、wxz と、大文字をそのまま小さく書く文字が続く。そこで、児童の誤りの中に、大文字の U やT、Y をそのまま小さくしてしまっているのでないかとも考えられる。小文字では、特に j において基準線より上に書いてしまう誤りがあり、鏡文字になる児童もいた。また、p や q、b や d を逆に覚えている児童もいた。このようなことから、大文字と小文字の区別を付けさせ、特に小文字については、4 線上に書く位置を明確に指導する必要があることと考える。

6. おわりに

小学校への文字導入に関しては、多くの議論があった。例えば中学校を例にあげ、「文字が出てくる段階でついていけなくなる生徒がいることも事実であるようだ（川上, 2014)」や、文部科学省（2015）の調査で「英語を読むことがうまくできないから(50.4%)」が英語を嫌いの理由として声が上がっていることもあり、文字指導の導入は慎重に行われた。逆に、文字や読み書きの導入に対しての賛成の声もあり、近藤（2020：135）は、「発達段階による知的欲求」や「文字による音声への気づきの相乗効果」「学んだ内容の記憶を助ける」「成果物が達成感や学習動機の維持につながる」をあげている。このように、指導の如何によっては、文字や読み書きといった指導は、効果が見られる反面、懸念される英語嫌いを生むことも常に考慮しながら、文字指導に当たるべきだろう。

＜参考文献＞

アレン玉井光江（2006）.「小学生のアルファベット知識について」『ARCLE 研究紀要 第 1 号』

アレン玉井光江（2013）.「公立小学校における Synthetic Phonics の実践－アルファベット知識と音韻認識能力の発達－」『ARCLE 研究紀要 第 7 号』

畑江美佳・段本みのり（2017）.「小学校におけるアルファベット指導の再考―文字認知を高めるデジタル教材の開発と実践―」『小学校英語教育学会誌』17 巻, 20-35

石濱博之（2015a）.「外国語活動の授業でアルファベットを書く練習を導入した事例報告」『中部地区英語教育学会紀要』44 巻 133-14

石濱博之（2015b）.「ある小学校の外国語活動におけるアルファベット学習の導入に関する事例報告」『上越大学研究紀要　第 34 巻』

伊藤治己（2013）.「外国語活動における文字の扱い再考－文字を使っての指導と文字指導を区別しよう－」『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要 第 4 号, 27−38, 』

兼重昇・藤井浩美・瀧本耕平・梅本龍多・小笠原剛士（2020）.「児童の「書くこと」に関する実態調査」『樟蔭学園英語教育センターフォーラム　第 9 号 1-15』

国立教育政策研究所（2009）.「平成 20 年度小学校における英語教育の在り方に関する調査研究　成果報告書」

近藤暁子（2020）.「小学校における英語の読み書き指導についての一考察」『兵庫教育大学　研究紀要 第 56 巻　pp.133-142』

文部科学省（2006）.「小学校における英語教育について（外国語専門部会）『中央教育審議会教育課程部会資料』. https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku/1bunka/dai8/sankou2.pdf（令和 3 年 1 月 16 日アクセス）

文部科学省（1998）.『小学校学習指導要領』

文部科学省（2009）.「小学校外国語活動研修ガイドブック」

文部科学省（2001）.『小学校英語活動実践の手引き』東京：開隆堂出版

文部科学省（2008）.『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』

文部科学省（2015）.「小学校の英語教育に関する意識調査　結果の概要」. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1379978.htm（令和 3 年 1 月 10 日アクセス）

文部科学省（2017）.『小学校学習指導要領』

中村典生・末松綾・林田宏一（2008）.「小学校英語における文字指導と課題一英語ノート（試作版）の内容を踏まえて一」『小学校英語教育学会紀要』第 9 巻 63-70